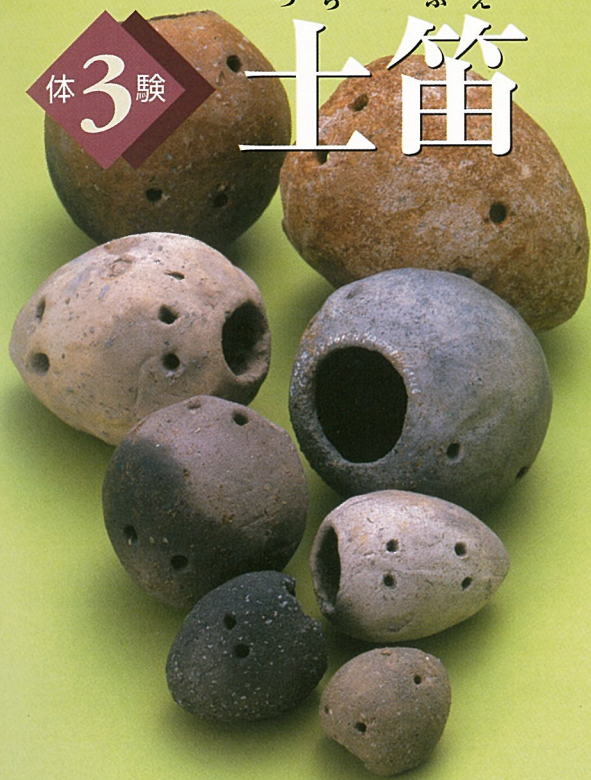


体3 験

# つちぶえ 土笛



タテチョウ・西川津遺跡から出土した実物の土笛

## 神への祈りの言葉 弥生時代のしらべの謎にせまる

### 概要

古代の楽器について学び、粘土を使って土笛を作る。実際に吹いて音を出してみる。

### ねらい

土笛を作ったり、古代の不思議な響きを奏でてみたりすることにより、生活や祭祀の様子など、古代の精神世界に思いをはせる。

### 所要時間

- ロングバージョン(野焼きで焼く場合)  
半日と110分(作業50分、乾燥60分、焼成半日)
- ショートバージョン(自然乾燥させる場合)  
90分

### 必要なもの

(値段は一人分の目安)

**材料** 粘土(野焼き用)……500グラム(147円)

### 道具

粘土板、ヘラ、竹串、糸、スプーン、ビニール、水を入れる容器、頭が直径5ミリ程度の釘またはビス等

## 土笛(陶埴とは)

1966年、山口県下関市綾羅木郷遺跡の発掘調査で不思議な土製品がみつかりました。握りこぶし大で卵の形をしており、上の部分に大きな孔があいています。また、前に4つ、後に2つの小さな孔があいていました。発見当初、その形からタコを捕るための「イダコ壺」ではないか、という説もありましたが、古代中国(約3200年前)で使われていた陶埴という名前の土笛に似ていることから、日本でも楽器として使われたと考えられています。

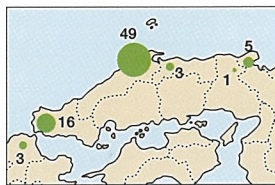
弥生時代の楽器は現代の音楽のような娯楽のためのものではなく、祭祀の時に使われたのだらうと言われています。神に感謝し、祈りをささげ、神の声を聞くまわりの場で、土笛の独特の音色が鳴り響いていたのでしょう。



## 土笛の分布

地域名	府県名	遺跡数	出土点数
北部九州 響灘沿岸地	福岡	2	3
	山口	5	16
松江周辺地	島根	5	49
	鳥取	2	3
丹後周辺地	兵庫	1	1
	京都	3	5
その他	静岡	1	1
合計		19	78

県ごとの土笛出土数  
参考:『神々の源流』大阪府立弥生文化博物館(2000年)



土笛は、弥生時代前期中葉から中期初頭まで(紀元前4~2世紀)の時期に作られ、福岡県北東部から京都府北部にかけて出土しています。全国で出土した78点のうち49点が島根県で発見され、その大半が松江市西川津遺跡と、その隣のタテチョウ遺跡からの出土です。

このように土笛はほとんどが日本海沿岸地域に分布し、時期も弥生時代前半に限られていることから、稲作などの文化とともに日本海ルートによって広まったものと考えられます。しかし土笛は、後の時代に伝えられることなく突如消えてしまいます。出雲地方でこれほど重宝された土笛が、どうして使われなくなったのか、謎につつまれています。

※例外的に、弥生時代後期のものが静岡県浜松市の伊場遺跡から出土しています。

## 土笛の使い方

土笛を楽器としてみたとき、不思議な点があります。それは出土品の多くが、歌口(吹く孔)が大きすぎて、普通に吹いたのでは音をだすことができないのでは、と思われることです。弥生時代の人たちは現代人が想像する以上に土笛を鳴らす技術に長けていたのかもしれませんが。

一方、実用的な楽器から祭り専用の見ための小道具として、鳴らす機能を失っていったのではないかとみる説もあります。

しかし、ひとつの遺跡からみつかる土笛のなかにも、音程が異なる大中小の3サイズがあることから、音の高低を意識していたことは間違いありません。全ての土笛が吹く機能を失ったのではなく、やはり多くの土笛は音を出すための楽器だったのでしょうか。

## 土笛の作り方

弥生時代の作り方は正確にはわかりません。おそらく塊からこね上げる方法か、粘土紐を積み上げる方法だと思われます。歌口が大きいのは指を入れて仕上げるのに都合が良かったのかもしれませんが。この方法では整った卵形に作る事が難しいため、今回紹介するのは昔と異なる最も簡単な方法です。歌口の孔を小さくすることができるので、誰でも容易に音を出すことができます。

# 土笛を作ろう!

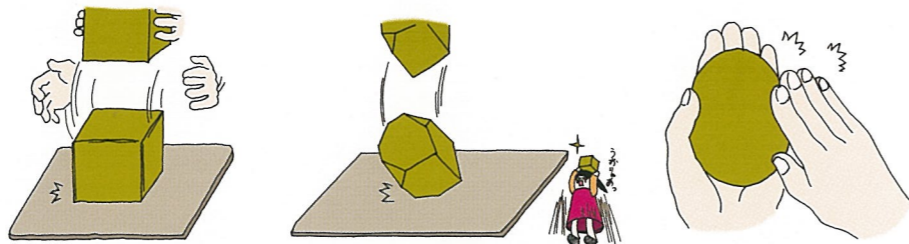
**応用** 学年や作業時間によって、300~500グラムのあいだで粘土の大きさを加減しましょう。大きいと作業時間が多くなり、音を出すのに技術が必要ですが、深く深みのある音が鳴ります。小さいものは早く作れて、簡単に音を出すことができます。手のひらが小さい中低学年や、初めて挑戦する場合には小さい方がおすすめです。

## 1 成形

(粘土をまとめて卵形にする)



所要時間  
5分



- ①袋から出した粘土を、粘土板に叩きつけながら立方体にします。
- ②角を粘土板に叩きつけることを繰り返し、まん丸の球を作ります。
- ③片方の手のひらで持ち、もう片方の手で軽く叩きながら少しずつ粘土を回転させ、卵形にしていきます。いろんな方向から見て、バランスがとれているかチェックしましょう。

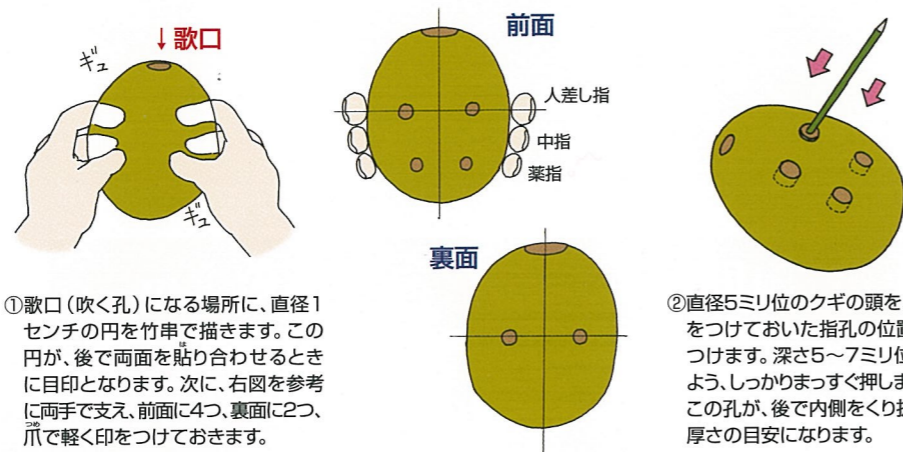
! ビニール袋から出した粘土は素早く成形しましょう。乾燥しすぎると、後半でひび割れの原因となります。

## 2 印付け

(歌口と指孔の位置を決める)



所要時間  
5分



- ①歌口(吹く孔)になる場所に、直径1センチの円を竹串で描きます。この円が、後で両面を貼り合わせるときに目印となります。次に、右図を参考に両手で支え、前面に4つ、裏面に2つ、爪で軽く印をつけておきます。
- ②直径5ミリ位のクギの頭を、爪で印をつけておいた指孔の位置に押しつけます。深さ5~7ミリ位になるよう、しっかりまっすぐ押しましょう。この孔が、後で内側をくり抜く時の厚さの目安になります。

## 3 切断

(粘土の卵を半分にして乾燥する)



所要時間  
5分  
乾燥時間  
約60分



- ①歌口の円を半分に切るように、たて半分に切断します。両手で糸をピンと張り、たるまないよう張ったまま一気に真下に下ろします。別の人に支えてもらうと良いでしょう。最後の部分は床に糸を押しつけるようにして切り終えます。
- ②切断した粘土をビニールに伏せて約60分置き乾燥させます。表面が乾いて固まることで、形がくずれにくくなります。ビニールにふれる側は湿り気が保たれるため、後でくり抜く作業が容易になります。

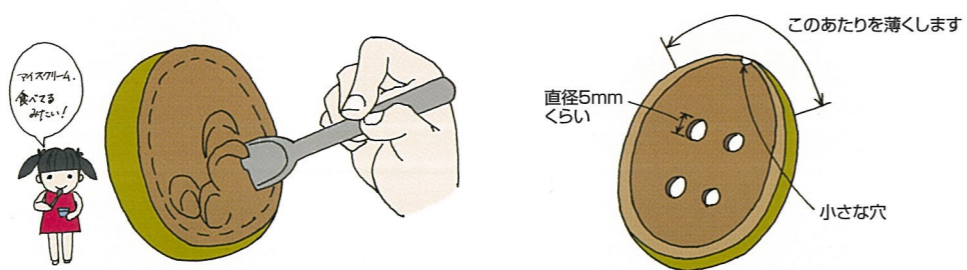
**工夫**  
急ぐ時はドライヤーを使ったり、エアコンのある部屋で乾燥させたりすると乾燥時間が短縮できます。

## 4 くり抜き

(中の粘土をくり抜く)



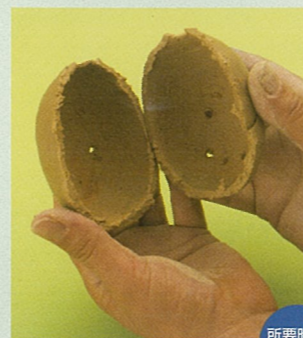
所要時間  
15分



- ①スプーンで内側の粘土をくり抜きます。時々指でつまんで厚さを確認しながら、少しずつ掻き取っていきます。"②印付け"で押しつけた指孔が内側から顔を出すと、壁の厚さがちょうど良いということになります。全体の厚さは6ミリ位が目安です。
- ②指孔の形を整え、歌口の部分に"②印付け"で描いた円よりやや小さめの孔をあけます。この孔は、貼り合わせた後に歌口を調整するヘラを入れるための孔です。歌口のまわりが薄くなるように、さらにいいいに削っていきます。

## 5 貼り合わせ

(くり抜いたものを卵形にもどす)



所要時間  
10分



- ①合わせ目の表面積を増やすため、接着面に竹串で細かく刻み目を入れておきます。
- ②内側をくり抜いた時に出た粘土を水で溶かして、どろどろになったもの(ドベ)を指先で接着面に塗りつけます。少しはみ出るくらいにたっぷりぬることが、後で割れてしまわないためのコツです。

! ドベや水が、接着面以外につかないよう注意しましょう。せっかく乾燥した表面が湿気をもつと軟らかくなり、形がくずれてしまいます。

- ③手のひらで包むように持ち、歌口の位置を合わせて貼り合わせます。少しこすり合わせるように力をゆっくり加え、隙間がなくなるようにします。形がくずれないように、慎重に。合わせ目を指の腹でなでて、合わせ目が見えなくなれば完了です。

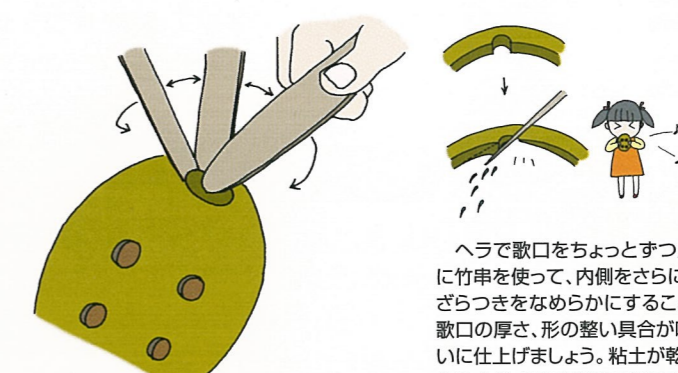
## 6 歌口の調整

(厚さをさらに薄く整える)



所要時間  
5分

\*写真は分かりやすくするため切断したものです。



へらで歌口をちょっとずつ広げ、直径1センチ程度にします。次に竹串を使って、内側をさらに薄く削っていきます。歌口を薄くし、ざらつきをなめらかにすることによって音が鳴りやすくなります。歌口の厚さ、形の整い具合が鳴りやすさを左右しますから、ていねいに仕上げましょう。粘土が乾きかけですこし堅い状態になってからの方が、うまく作業できます。

## 7 仕上げ

(表面を磨いたり模様をつけたりする)



所要時間  
5分



表面が乾ききらないうちに、スプーンの背などを使って磨いていきます。押しつけるようにしながらなでつくと、次第に光沢がでてきます。

へらや竹串などで好きな模様を入れ、オリジナルの土笛を作るのも良いでしょう。ただし、あまり模様が深くなりすぎないように...

## 8 焼成

(焼き上げる)

粘土を焼くことによってじょうぶな焼き物にすることができます。野焼きをする場合は、「古代体験マニュアルVol.1」を参照してください。少量なら、オーブントースターなどを使って焼くことも可能です。なお、焼成するには1週間以上の乾燥期間が必要です。

\*焼かない場合、水分がつくと土が溶け出しますが、十分に乾燥させれば焼かずにそのまま使えます。

## 【土笛の吹き方】

- ①口を平べったく、小さく開けます。
- ②息を細くするとく送ります。
- ③音がよく出るポイントを探します。



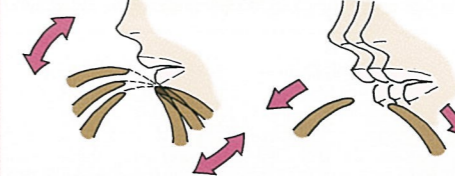
紙一枚はさんだつもりで

- ②息を細くするとく送ります。



歌口の奥に息をぶつけるように。

- ③音がよく出るポイントを探します。



くちびるを当てる角度を変えたり、口の位置を前後に動かしたりしてみる。

音が最も鳴りやすいのは、孔を全部ふさいだ状態です。安定して音がでるようになったら、指孔を開けてみましょう。指孔をひとつ開けるごとに音が高くなります。孔が大きければ音の上がり方も大きくなり、小さい孔なら少ししか音程が変わりません。孔の大きさを調整することで、ドレミ音階を作ることでも可能です。